第 29 回雲南懇話会資料

講　演　要　旨

１．「私の山旅、天山（TIEN SHAN）&アルタイなど」ーハン・テングリ（7,010m）、ベルーハ峰（4,506m）ほかー

日本山岳会（海外委員会、JAC 千葉）、パミール・中央アジア研究会　　坂上 光恵

1987 年に初めて旧ソ連（現在はカザフスタン）にある南テンシャンのタルガル山に登り、いろいろな人達と知り合いになり、テンシャンの山に行く機会が増えていった。一番の盟主ハン・テングリは見るだけで人を惹きつける山で、南面、北面両方から登る機会があった。また、アルタイ山脈の最高峰ベルーハは、ロシア、モンゴル、カザフスタンの国境にあり、入るのに時間がかかり、あまり日本人が入っていない山域である。後にいろいろな山に登るようになった原点の山々を紹介しようと思います。

２．「鉄器文化、石製鋳型を用いた鋳造技術」－四川省俄亜郷における納西族の民俗調査より－

奈良県立橿原考古学研究所調査部長　　宮原　晋一

俄亜郷は四川省彝族自治州木里蔵族自治県に属する、納西族を主体とする行政区画である。交通事情の悪さが幸いして紅衛兵が侵入しておらず、文化大革命の影響が少なかったため東巴文化が良好に残された地とされる。そこで石製の鋳型を用いた鋳造技術が残っているとの情報があり、2005 年と 2006 年に現地調査をおこなった。確認できた伝統的鋳造技術と、見聞できた納西族の生活を紹介したい。

３．「水・草・家畜からみた遊牧システム」－モンゴル国首都近郊牧畜民の事例から－

千葉大学文学部准教授　　児玉香菜子

モンゴル高原の自然環境の特徴は乾燥と寒冷です。同時に、社会主義をへて、市場経済化とグロバリゼーション下にあります。今回紹介するのは、モンゴル国首都ウランバートル市から約 150km の草原に居住する遊牧民一家です。降水量は 270ｍｍ程度、年平均気温は―1.8 度で、夏は涼しく、冬は氷点下 30 度を下回ります。日本とは異なる環境に暮らす遊牧民の四季折々の生活を水・草・家畜の利用から紹介します。

４．「ミャオ族の歴史と文化の動態」―中国南部山地民の想像力の変容―

慶應義塾大学文学部教授、日本山岳修験学会会長　　鈴木 正崇

本発表は中国南部の少数民族、ミャオ族（Miao 苗族）の生活実態の変容と継続について考える。ミャオ族は中国南部の貴州省・雲南省・湖南省・広西壮族自治区などの山岳地帯の居住民で、同系統の人々はタイ・ベトナム・ラオスにも住む。元々は山地の斜面を利用して焼畑耕作を営む移動性の高い人々と、河川盆地に定住し棚田を耕して稲作を営む人々から構成されていた。しかし、中国国内では社会主義や市場経済に翻弄され、急速に進む経済成長やグローバル化で大きな変容を遂げた。本発表では、30 年間にわたるつきあいを通してミャオ族の変容の過程や世界観の変貌を考察して、急速に進む社会・経済・政治の動きが山地民としてのミャオ族の想像力をどのように変容させ、再創造、再構築してきたかを探求する。

５．「果物のふるさと　西域（伊犁）」～リンゴの起源地での保全活動～

NPO 法人 西域生態系保全フォーラム理事長、静岡大学山岳部紫岳会、日本山岳会、静岡大学名誉教授　　大石　惇

天山北麓の伊犁州は、豊富な野生植物の生息地であり、特にリンゴの起源地とされている。しかし、新疆ウイグル自治区は地下資源の開発と工業化が進み、それに伴う人口の急増、食糧需要の増大から、農業開発と過放牧が急激に進んで、残っていた野生リンゴの群落も荒廃の一途をたどっていた。日中共同で植物の野生種を保存し、その特性を調査し活用して行くため、新源県に 100ha の「天山有用植物資源圃」を、1992 年から８年がかりで日中共同で建設してきた。今回は、1987 年から現在までの野生果樹の保全の様子を報告します。